

武藤 秀明

Hideaki Muro

天才・立原道造の建築世界

Michizo Tachihara
1914-1939



文芸社

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

口絵省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

天才・立原道造の建築世界

武藤 秀明

Hideaki Muro

文芸社

天才・立原道造の建築世界
目次

第1部 その作品

- 1 日本橋生まれ 10
- 2 ヒアシンスハウス 14
- 3 建築家・立原道造 17
- 4 秋元邸 21
- 5 屋根裏の自室 24
- 6 豊田氏山荘 31
- 7 師の下で 36
- 8 浅間山麓くろいに位する芸術家コロニイの建築群 39
- 9 新しき村 48
- 10 対談「小さな家」 52
- 11 建築家との交遊 58
- 12 再び建築家・立原道造 60

第2部 その建築論

- 1 親友・小場晴夫 68
- 2 「方法論」に接して 74
- 3 親友・生田勉 83
- 4 手始めに「住宅・エッセイ」を 86
- 5 「方法論」と格闘 88
- 6 格闘は続く 98
- 7 好きな建築家 104
- 8 浪漫派への接近 107
- 9 時間軸の追加 115
- 10 新発見の論文 118

第3部 「小さい感想」と私の小論

- 1 「小さい感想」全文 124
- 2 建築衛生学とは? 128
- 3 その時代の建築構造学 134
- 4 その時代の建築装飾意匠 137
- 5 新古典派建築 140
- 6 構造学の進歩 143
- 7 百尺の時代 148
- 8 純粹芸術 153
- 9 超高層建築 156
- 10 超高層の安全性 161

11 火事の教訓

167

12 建築衛生学の今

170

13 建築設備の進歩

174

14 アクティブとパッシブ

177

15 容積率

180

あとがき

190

あとがき——その2

193

第1部
その作品

1 日本橋生まれ

詩人であり、建築家である立原道造を知ったのがいつのことだったか、今となっては私には漠としてわからない。

天才的な詩人にして、東京帝大で建築を学び、卒業後ほどなくして夭折した人物として、記憶の片隅に留められてから、相当の年数を経ているように思う。しかし、その記憶はかなり曖昧なもので、名前すら明確に焦点が絞り込めず、声楽家の立川清登（一九二九～一九八五）と重なり合って「タチハラ……タチカワ……ええと、スミトかなミチトかな」などという程度のいい加減な記憶のまま、頭の片隅に放置しておいたほどだ。

文学好きの私だが、それはもっぱら小説でありノンフィクションであり随筆であって、詩は興味の対象から外れてもいた。一応、他人が勝れていると言う詩を聞いたり読んだり

して、なるほど素晴らしいと感じ取るぐらいはできる。つまり詩の鑑賞能力はあると勝手に自負してはいる。しかし、自ら求めて詩を味わおうとか、詩集を買おうとか、まして詩を作ってみようなどとしたことはない。したがって、立原道造の詩に接したという記憶もなく、ただ夭折した天才というイメージだけで詩人と認識していたにすぎない。

立原は建築家でもあるのだが、専門教育を受けて後の実働期間は極めて短く、その作品、業績などの面で迫ろうとしても迫りようもないのが実情であろう。私も建築の専門教育を受け、建築主事として建築行政の第一線に立った経験があるが、建築という分野で立原を意識したことは一度もない。近・現代建築史の書物をひもといても、その方面からの検索はほとんど不可能に違いあるまい。

そうした漠とした状態で、私が立原道造に行き着いたのは、彼が日本橋生まれという一点においてであった。

私が中央区役所の本庁勤務を離れ、旧日本橋区の区域を所管する日本橋特別出張所に所長として着任したのが、二〇〇二年四月のことだが、その前後の頃から日本橋生まれの立原を意識するようになった。

着任したその年の秋、中央区文化国際交流協会主催で、立原の研究者である中央区教育委員・渡邊俊夫先生の講演会があった。私もその受講を申し込んだのだが、運悪くその直前に病を得て入院してしまい、聴かずじまいに終わってしまった。

退院、職務復帰後、歩くことが健康に良いことを認識し、休みの日など努めて街を歩くようにしているのだが、そうしたある日、本郷の東大付近を歩いていて偶然、立原道造記念館の前に至った。同行していた妻と一緒に、すぐに館内に足を踏み入れた。私がうる覚えの知識ながら、蘊蓄を傾けつつ一巡りした。

改めて立原の生い立ちを記すと、彼は、一九一四年（大正三年）七月、当時の東京市日本橋区橋町三丁目で生を受けている。現在の中央区東日本橋三丁目に当たる。

立原の生家跡は、正確には東日本橋三丁目九番二号となり、都営地下鉄新宿線の馬喰横山駅のすぐ近くで、現在、小豆色のノッポビルが建っている。

日本橋人形町一丁目七番一〇号は、文豪・谷崎潤一郎（一八八六―一九六五）の生家跡に当たり、中央区教育委員会の手で、その旨を記した案内板が立てられている。

天折した立原は、文学史の中でも文豪と呼ばれるような地位は得てなからう。でも、

生家跡に何の印もないのはやはり寂しい。

立原はこの地で成長し、学校に通う。久松尋常小学校では、六年間首席を通じたという。中学は、隅田川を渡って府立第三中学校（現東京都立両国高等学校）へ。この地の名門校である。さらに本郷の第一高等学校（現東京大学教養学部）、東京帝国大学へと進み、社会人としての第一歩を、銀座の石本建築事務所に求めた。

その短い生涯は、この日本橋の地を中心に営まれた。

日本橋は、江戸時代からの伝統を受け継ぐ商業の街である。近年、都心の地価下落もあり、マンションが林立し、また別の新しい街の顔を見せつつあるが、元来は商家を中心とした下町文化の街である。気質としては多少荒っぽさを伴う、活気溢れる街……。

詩作にふける繊細な人物には、今ひとつ違和感の拭えない街でもあったと思う。繊細な感性と、六年間首席を通すずば抜けて明晰な頭脳……。そこに立原の天性を見るとともに、ともすればいじめにでも遭いそうなキャラクターもうかがえる。

しかし、この地でしっかり成人し、その天分を存分に發揮し得たことは、この地の持つ懐の深さも私には感じられる。

2 ヒアシンズハウス

さいたま市南区の別所沼畔に、ヒアシンズハウス（風信子荘）と呼ぶ小住宅が建っている（*1）（*2）。木造平屋の極めて簡素なワンルーム住宅で、面積はわずかに十五平方メートル。その十五平方メートルの中に、ベッド、テーブル、机、腰掛けなどが機能的に配置されている。片隅に便所はあるが、台所と風呂はない。自炊はせず、週末の数日間のみ過ごす別荘としての、必要最小限の居住空間を追求したもののようにだ。

現在、しばしば見かけるワンルーム・マンションの一室は、概ね二十平方メートルである。そこからキッチン、バス、洗濯機などの配置スペースを除けば、このヒアシンズハウスの居住空間に相当するかもしれない。独身青年の身の丈に合わせたオーダーメイドの別荘風住宅となろう。

昔の日本家屋のような大仰な玄関は、もとよりのない。出入りのための必要最小限の口が、立面に穿た^{うが}れているにすぎない。しかもそれは、巧みにひねられており、住宅に何より必要なプライバシーの保持に十分意を用いている。このひねりは併せて、小さな住宅であっても来訪者に、奥に続く空間に様々の期待を抱かせる巧みな仕掛けでもある。

靴脱ぎのスペースはない。靴を履いたまま出入りする、完全な洋風生活を前提にしている。扉も内開きだから、これまた西洋式である。

現在、我々の住生活も洋風化が進み、売り出されているマンションの中には、畳の一枚もない住戸も見受けられる。しかし、靴だけは必ず脱ぐ。我が国の気候風土との適合も考えた場合、いずれが適当かの議論は別として、この小住宅の大胆さは注目に値する。

単純な片流れ屋根を持ち、外観はこれ以上簡素化のしようもない。極限の美とでも呼ぶべき印象である。現代の建築家・安藤忠雄（一九四一〜）のデビュー作「住吉の長屋」にも匹敵する簡素美と言えよう。

このヒアシンズハウスの設計者こそ、詩人で建築家でもある立原道造である。

立原は、帝大を出て就職後間もない「一九三七年冬から翌三八年春にかけて、当時、葦

が生い茂り静寂を極めていた別所沼の畔に、自らのために小さな週末住宅を建てようとしていた」という。そして、五十通りもの試案を重ね、スケッチを残した。しかしその後、病を得て休職に至り、一九三九年三月に世を去る。

この住宅が建ったのは、彼の没後六十五年を経た二〇〇四年十一月である。さいたま市が、政令市記念市民事業として土地を無償提供し、ボランティア団体が募金を集めて建設費を捻出したという。

立原の東京日本橋での住まいは、木造三階建ての屋根裏部屋であったようだ。一階が店で、二階が家族の住まい、立原は三階に当たる屋根裏に自分の居室を求めたのだろう。そこで、詩作も勉強もしたに違いない。

太平洋戦争前の一般庶民の生活は、皆そのようなものだったろう。外へ出ても庭があるはずもなく、緑と接する機会など皆無であったろう。

もっともこうした環境は、現在の都心の高密マンションも変わるところがあるまい。

繊細で情感豊かな立原が、当時は緑豊かだった浦和の地に、若い彼でも手が届きそうな小さな別荘、週末住宅を欲したのは、自然の成り行きと思う。

ヒアシンズハウスが建つ別所沼畔は、公園に指定されたが故に、かろうじて緑が残されたにすぎない。

それならば本来、どんな小規模でも住宅や別荘は建ち得ないのだが、立原の作品故に後世の愛好家の努力で建ち得た。形は立原の構想そのものでも、本来の住宅としての機能は永遠によりみがえることはない。

3 建築家・立原道造

大学で建築を学んだ後、わずか二年で早世してしまった立原道造を建築家と呼べるのだろうか？

まず、建築家とはどういう人を指すのか、考えてみたい。建築士の資格を持つ人、あるいは建築の設計監理業務に携わる人一般を指すのだろうか？ そういう見解の人もいるだ

ろうが、私は違う。

作家、詩人、画家、作曲家などと同じ、芸術作品を生み出し、それで人々に感動を与えられる少数の人を指すのだと思う。そうした能力は、多分に天賦の才によると私は思う。

大学の国文学科を出れば、誰でも作家や詩人になれるわけではない。また一定の資格試験のようなもので与えられるはずもない。建築士イコール建築家などというのは、全くのお笑いぐさだ。

もちろん、教育は大切である。小中学校の国語の授業で誰でも作文や詩作を習うが、作家や詩人を養成するためではない。小説や詩、その他の文学作品を鑑賞できる教養を身に付けさせるためであらう。国民が、単に読み書きを習得するだけでなく、そうした教養を備えることは、義務教育の大切な役割でもある。

一方、文学の才能を持つ少数の人は、その表現手段として言語を習得した瞬間から、作家であり詩人である、と極言しても良いと私は思う。もちろん、玉磨かざれば光なしであるから、天分の上に努力を重ねなければ、人々を感動させられる作品を作り得ないのも、自明である。

立原は、詩作はもとより、美術、造形面でも、芸術家としての天賦の才を持っていた。したがって、言語を操れるようになった瞬間から詩人であった。そして、日々詩作に励み、その才に磨きをかけた。同様に、大学で建築の専門教育を受け、建築に関する力学などの基礎を学び、表現手段としての製図法などを習得した瞬間から建築家であったのであろう。

さらにその玉を磨き続け、恩師の帝大教授・岸田日出刀（二八九九～一九六六）の推薦で、恩師の先輩建築家・石本喜久治（一八九四～一九六三）に師事する。そこでの活動期間が、実質一年余にすぎなかったことは甚だ無念だが、その長短が建築家としての価値を左右はしまい。

立原の建築家としての天分は、東京帝大在学中の三年連続辰野賞受賞でも証明できよう。

辰野とは、辰野金吾（一八五四～一九一九）のことである（*3）。東大建築学科の第一回卒業生の一人で、トップ卒業であった。イギリス留学後母校の教授となる、我が国の建築家の草分け的存在だ。作品には、日本銀行本店、東京駅などがあり、いずれも近代建築として不朽の名作となっている。

トップがいれば、ビリもいる。余談だが、辰野と同じ東大建築学科一期生のビリも、きちんと記録されている。といっても、一期生はわずかの四人だから、四番がイコール、ビ

りでもある。

それは、佐立七次郎（二八五六～一九三三）という人物で、彼の作品も立派に残っている。小樽市にある旧日本郵船小樽支店である。小樽を訪ねる方は、運河や裕次郎記念館と併せ、この旧郵船小樽支店にも是非寄っていただきたい。明治の息吹を伝える見事な石造洋風建築である。

トップでもビリでも（もちろん、二番、三番の人もだが）立派な作品を残していることは、明治初年に建築家を志した若者達の並々ならぬ努力と意気込みを感じる。その流れを汲む切磋琢磨の場での三年連続受賞は、立原の抜群の才能、不断の努力を余すところなく伝えていると思う。

立原の一期後輩に、建築家・丹下健三（一九二三～二〇〇五）がいる。彼の年譜によれば、立原の卒業後の一九三八年に辰野賞受賞の記載がある（*4）。彼の受賞は、これ一度のようだ。後に世界の丹下と呼ばれるようになる彼にして、一度きりとすれば、立原の三年連続受賞がいかに偉大か、わかるう。

4 秋元邸

ヒアシンスハウスで見せた優れた小住宅設計の才を、立原が実現できたのはたった一作しかないという。一高の先輩・秋元壽恵夫の依頼で設計し、横浜市日吉の高台に建ったという秋元邸一作のみである。

残されている図面は、現実に建ったとおりではないようだが、現代の間取りで呼べば、1LD・Kである。面積は三十五平方メートル。他に十三平方メートルの大谷石を敷き詰めたベランダが付く。LDとKの間に「・」が付くのは、リビングダイニングとキッチンが別になっているからである。

リビングダイニングは十六平方メートル（十畳相当の洋間）で、住宅の中央を占めている。その奥に、七平方メートル（四畳半相当）の寝室がある。ベッドはツインで配置され

ており、狭いのは事実であろう。

一方、LDと寝室が囲む屋外に十三平方メートル（八畳相当）の大谷石を敷き詰めたベランダを設けている。小住宅にしては、なかなか贅沢な造りだと思う。寝室などの狭さを補って余りある豊かな空間である。

ちなみに私は宇都宮の生まれで、大谷石はその地の特産品である。柔らかい温かみのある素材として、私は子供の頃から気に入っている。

キッチンはずかしの四平方メートル。しかも勝手口みたいな出入り口が付いていて、これが住宅の玄関でもある。先のヒアシンズハウス同様控えめで、そして巧みにひねり、プライバシーの保護に意を尽くしている。これこそプロの技だ。

私は、住宅に一番大切な要素は、プライバシーの保護に対する機能性だと思っている。そこで、いつもこの玄関のひねり方に注目する。

私の義兄が、埼玉県の小都市に鉄骨造三階建ての自宅を建てたことがある。設計は、義兄の書いた間取り図をほとんどなぞったもののようなのだが、さすがにプロの建築士は一箇所だけ明確に修正した。玄関である。巧みにひねりを加えたのだ。プライバシーの保護

と併せて、小さな家でも、来訪者にその先に期待を抱かせるような造り方で、ここにプロと素人の違いが出る。

一方、私が生まれた宇都宮の家は、3Kの間取りで、四畳半の茶の間がリビングでありダイニングであった。玄関を開くと、その茶の間が丸見えになってしまい、プライバシーも何もあったものではなかった。

私は一九四〇年代の生まれだが、家は三〇年代かそれ以前の建築と想像される。立原が建築家、詩人として活躍した時代に重なるが、一般にはプライバシーなど、ほとんど意識されていなかったであろう。

もともと私の家は、バスがもうもうと砂塵を巻き上げて走る砂利敷きの県道から路地を入った奥にあった。この路地こそ、表から奥へと誘いつつ、人の気持ちに一定のけじめをつけさせる、自然の仕掛けであったとも言えそうだ。

秋元邸はもちろん、キッチンに加えて便所も浴室も脱衣室も付く。しめて三十五平方メートルの空間は、新婚世帯の必要最小限の居住機能を手際よくまとめた結果であろう。

私が新婚時代を送ったのは一九七〇年代で、埼玉県の小都市の2K、三十平方メートルの

木造平屋の小住宅に住んだ。六畳の和室をリビング兼ダイニングとし、四畳半を寝室にした。

入居当時は、特段不便を感じなかったが、子供が生まれたら途端に狭くなった。二人目が生まれるまでに、3LDK程度の住宅に移らざるを得なかった。

秋元邸も、新婚当初は快適だっただろうが、子供ができるなどすれば、そのままでの対応は困難となつたろう。現に、一九五〇年代に至って増改築により大きく形を変え（*5）、それも今は残っていないようだ。立原の珠玉の一作も、あくまで新婚世帯の機能に限った素晴らしい小住宅としての評価になろう。

5 屋根裏の自室

立原は、東京市日本橋区の生家で成長後、三階の屋根裏部屋を居室にしていたという。そして、「バー・コペンハーゲン」と名付けたそうだ（*6）。

年譜によれば、一九三八年に「北欧建築への憧憬からデンマークとスエーデンの建築雑誌を予約購読」との記載がある（*7）。コペンハーゲンはデンマークの首都である。そこに建つ中層住宅の最上階をイメージしたかもしれない。

私は子供の頃、時々東京の親戚を訪ねることがあった。その家は下町・荒川区の日暮里にあったが、栃木県の宇都宮から出て来て驚いたことがある。すべての地面が、舗装されていたことだ。道路は細い路地に至るまで、学校の校庭までも舗装されているのは、カルチャーショック以上のものを感じた。

私が住んでいた宇都宮では、県道も砂利敷きで、バスやトラックが通るたびにもうもと砂塵が舞い上がり、路地は当然土のまま、雨が降ればあちこちに水溜りができる。

埃も立たないぬかるみも生じない清潔な環境の一方で、緑のほとんどない高密な居住空間は、息苦しさすら覚えた。ただその中に、空間を立体的にも活用する様々な工夫も見た。

私の親戚の家にも、屋根裏部屋があった。そこを私と同じ歳の男の子（私のはとこ）が使っていた。はしごで上り下りする子供でも背が伸ばせないほどの狭い空間だったと記憶

しているが、私にはうらやましい限りだった。一般に子供部屋など普及していなかったその頃、どんなに狭くても自分だけの占有空間を持つことは、誠に素晴らしく思えた。

立原の屋根裏部屋は、成人してから用いたのだから、私のはとこの部屋よりは当然広かったと思う。凶面など見ていないのでわからないが、残されている立原愛用のランプを手掛かりに探してみると、次の詩のようだったのだろう。

私のかへつて来るのは いつもここだ

古ぼけた鉄製のベッドが隅にある

固い木の椅子が三つほど散らばつてゐる

天井の低い 狭くろしい ここだ

ランプよ おまへのために

私の夜は 明るい夜になる そして

湯沸しをうたはせてゐる　ちひさい炭火よ

おまへのために　私の部屋は　すべてが休息する

——　私は　けふも　見知らない友を呼びながら

歩き疲れて　かへつて来た　街のなかを　私は　けふも　疑つてゐた　そして激しく
渴いてゐた……

窓のない　壁ばかりの部屋だが　優しいが

すつかり容ようす子をかへてくれた……私が歩くと

ここでは　私の歩みのままに　光と影とすら　揺れてまざりあふのだ

〔「私のかへつて来るのは」〕（*7）

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

武藤 秀明 (むとう ひであき)

1947年 宇都宮市に生まれる。
1970年 宇都宮大学工学部卒業。東京都技術吏員に。
中央区配属。
1975年 工学院大学第二部卒業。
1978年 一級建築士登録。
1984年～ 中央区役所で営繕、環境保全、建築の各課長を歴任。
2002年～ 中央区日本橋特別出張所長。
家族：妻、2男（独立）



【著書】

『利根川図志で読む静御前』栗橋町民フォーラム刊行／2004年（元早大理工学部教授、工学博士・遠藤郁夫先生〔1930～2004〕との共著）

『利根川図志で読む川船のはなし』栗橋町民フォーラム刊行／2005年

天才・立原道造の建築世界

2006年4月15日 電子出版発行

著 者 武藤 秀明

発 行 者 瓜谷 綱延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Hideaki Muto 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-00937-8

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。）

新 06.04.04 Y.H.